西洋史

大学出版会の健闘ぶりが光る

将来を見据えての企画を実現

高木勇夫

福島の原発事故が現代の危機的状況を露わにする前から、新聞雑誌はもちろん、大学人の出版活動を含めた活字メディアの劣化は誰の目にも明らかだった。年内に5冊で完結する『三宮宏之著作集』（福井憲彦・林田伸一・工藤光一編、岩波書店）の1『全体を見る眼と歴史学』と2『深層のフランス』は社会史的総合の意義を説いた論考だが、本家のアナール派は別として日本の歴史研究者でそれを実現できた例は乏しい。今年の成果から拾うと、蔵持不三也『英雄の表徴―大盗賊カルトゥーシュと民衆文化』（新評論）が、豊富な史料と民俗学的想像力をもって18世紀の政治社会を描ききり、社会史の地平をおし広げた。

専門史家によらない仕事が、過去はすべての人と地域に開かれていることを証しする。小林恭子『英国メディア史』（中央公論新社）と村田京子『女がペンを執る時―19世紀フランス・女性職業作家の誕生』（新評論）は、現代人の感覚で捉えられるかぎりの過去の独自性を明らかにしようとする態度で共通する。歴史書出版社で目を引いたのは、藤川隆男『人種差別の世界史―白人性とは何か？』（刀水書房）とN・I・ペインター『白人の歴史』（越智道雄訳、東洋書林）。前者はオーストラリア社会の頂点に立つ白人支配の根拠を難じ、後者はアメリカ政治の正統性に意義を申し立てる。関連して、安武秀岳『自由の帝国と奴隷制―南北戦争前史の研究』（ミネルヴァ書房）を挙げておく。大手の腰が引けているだけに、将来を見据えての企画を実現した大学出版会の健闘ぶりが光る。隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」―フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』と富永茂樹編『啓蒙の運命』（ともに名古屋大学出版会）は、自己完結した従来の18世紀文明のとらえ方に再考を迫る。鈴木杜幾子『フランス革命の身体表象―ジェンダーから見た200年の遺産』（東京大学出版会）は新古典主義の絵画・彫刻手法をとりあげ、理想と夢想のあわいに潜む暴力性を浮かびあがらせた。

最後に優れた翻訳を六点紹介しておこう。A・エヴァリット『ハドリアヌス―古代ローマの栄光と衰退』（草皆伸子訳、白水社）はイギリスの知識人と読書界の懐の深さを示し、A・コルバン『快楽の歴史』（尾河直哉訳、藤原書店）はフランス社会史の王道を行く。N・バンセルほか『植民地共和国フランス』（平野千果子・菊池恵介訳、岩波書店）は国民史の枠を越えた空間的知識を豊かにしてくれるし、M・V・クレフェルト『戦争の変遷』（石津朋之訳、原書房）は単純な戦争批判にとどまらない新しい世界認識のあり方を教えてくれる。N・ウィルソン『歴史学の未来へ』（南塚信吾・木村真訳、法政大学出版局）は歴史学研究の現状解説に巧みで、J・R・マクニール『20世紀環境史』（梅津正倫・溝口常俊訳、名古屋大学出版会）は自然への働きかけの緊急性を訴えて3・11後の指針となる。（たかぎ・いさお氏＝名古屋工業大学教員）

日本史

○年の余韻

」一三〇〇年

好信

奈良に住んでいると、まだ去年の遷都一三〇〇年の余韻が残る。引き続いて平城京関係で刊行された書籍に吉田歓『古代の都はどうつくられたか』（吉川弘文館）がある。中国・朝鮮・渤海の都城制と比較検討しながら平城京について論述する。その平城京の都市機能を述べながら古代国家の支配を古代交通の視点から叙述し業が来年の「古事記」一三〇〇年、回顧すべき「古事記」関係の著作としては、記紀にしるされた皇統譜やその比較研究、「日本書紀」系図について考究した荊木美行『記紀皇統譜の基礎的研究』（汲古書院）がある。聖徳太子は「日本書紀」によって創りだされたとの前提に立ち、その成立の背後にある編者の思惑を明らかにする。そして「日本書紀」を中心に、考古学の成果や木簡、歴史地理学をはじめさまざまな領域の研究成果を咀嚼して、大化改新、壬申の乱と続く激動の七世紀の政治文化を論じたのが吉川学芸出版）は、正倉院文書の整理・復原、扱い方、読み解きの方法から写経事業と王権の関係まで論究す

東洋史

辛亥革命勃発から百年

孫文の主要な議論が手軽に読めるように

関智英

清朝が倒れるきっかけとなった辛亥革命の勃発から百年の今年、記念式典やシンポジウムが各地で開かれた。まず辛亥革命の主役孫文を軸に中国近現代史の成果を挙げていこう。孫文の代表的議論が、深町英夫編訳『孫文革命文集』（岩波文庫）として整理された。丁寧な解説が付されており孫文の考えに触れる最初の一冊として良い。安藤彦太郎訳の『三民主義』と合わせ、孫文の主要な議論が手軽に読めるようになった意義は大きい。

辛亥革命は中国にとっては二千年にわたる王朝支配の終焉を意味したが、一方でチベットなど周辺地域にも影響を与えた。革命をきっかけに清朝に属していた外モンゴルは活仏を首班に独立を宣言、現在のモンゴル国の源流が誕生する。この経緯に迫る橋誠『ボグド・ハーン政権の研究』（風間書房）はモンゴル語の文書も活用。「周辺」からの視角は時に「自明の前提」が自明でない事に気付かせてくれる。

孫文の死後、当初その後継者と目された汪兆銘は日中戦争がはじまると日本占領地に日本との和平を標榜する政府（汪政権）を樹立する。汪政権については土屋光芳『汪兆銘政権』論』（人間の科学新社）と堀井弘一郎『汪兆銘政権と新国民運動』（創土社）を得た。後者は汪政権下の民衆動員の実態に切り込んでいる。

日本の侵略が抗戦陣営にも大きな変革を齎したとするのは笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』（講談社選書メチエ）だ。現在中国の社会構造の基本が日本の侵略に対抗するための総動員体制にあったという切り口は、かつて孫文が「ばらばらの砂」に例えた中国社会の今後を考える際にも有効な視点となろう。

○九年末に話題になった「曹操墓」の発見に関連して河南省文物考古研究所編著『曹操墓の真相』（国書刊行会）が翻訳された。曹操墓でないという主張もあるが、この議論が単なる被葬者探しに止まらず、該時期の研究が深まる契機となることを願いたい。中国研究とは切り離せない中国語について、甲骨文字から現代までをわかりやすくまとめた大島正二『中国語の歴史』（大修館書店）も興味深く読んだ。

新城道彦『天皇の韓国併合』（法政大学出版局）は日本の韓国併合により新たに「王」「公」の称号を与

●近世史

織豊期の研究に大きな成果

福留真紀

今年は、近年盛り上がりを越えて」（柏書房）では、10人の研究者が様々な切り

伊徳川家の研（清文堂出どが版）、田代和人生『新・倭館―鎖国時代の日本人町』（ゆまに

書房）、田中暁龍『近世前期朝幕関係の研究』（吉川